

1. 問題の所在

1.1. 「使えない」ミルズ：極私的回想

私事で恐縮だが、学生時代よりミルズ研究に何度も挫折してきた。そのたびに手に取った、とある著作の一文に倣って報告タイトルとした。

ミルズは「使う」つもりで読むと、心が折れる社会学者である。ことばは鋭く、洞察力に富んでいるが、概念的な整理をすると、恐ろしくつまらなくなる。ターミノロジーはいささか自己流で、論理の飛躍を感じる。力強いことばで読ませてしまうところがある。でも、言われているのはあたりまえのことものようにも思われる。せいぜい初心者向けの凡庸な説教にすぎないと断じた人もいる。正直、「だよな」と何度も思った。

でも、読むことで、社会や学問についての展望が拓けることもある。概念読みを嫌い、ミルズを評価する人もいた。ミルズは、わかっているかのように書いているのではないか。ミルズの書きかたは、工夫されたものであり、作意を丁寧に読み解くことこそが大事なのではないかと。

一方、理論的な関心を持つ人のなかにも、そこになんらかの「原石」を拾い出して、自説を展開する「利用」は少なくない。しかし、せいぜい枕として、お約束のように一言されているだけのようにも見える。

ミルズ自身は、「読んでなにかが変わった」と言われれば、おそらく満足だとは思う。ただ、一歩進めて、ミルズが対峙したアメリカ社会と社会学のコンテクストをめぐり、著作を内在的に検討することで論じることができないのか、とも思う。今回報告の機会をいただいたので、その点を考えてみたい。これがタイトルの趣旨である。

問題意識をもう少し説明しておきたい。

1.2. 大衆化の定義と現代社会論

タイトルには「現代」とあるが、**Cミルズ**を通して意味を考えてみたいのは、現代社会の大衆化である。数多くの定義のなかで、本報告が目にするのは、村上泰亮の論考である(村上1985)。コンパクトな論考だが、社会学史の布置連関を簡明に整理したものとしても読める。

村上は、外的構造＝社会構造と内的構造＝判断構造の非構造化として大衆化を定義した。この定義は、ウィリアム・コーンハウザー(William Alan Kornhauser)の自律性変数論をもとにして、構造の喪失を肯定的にとらえるとともに、堅牢な判断構造、核となる価値からアヴェイラビリティを論じるものであった。こうした歴史総括により、米国から日本へと世界史の焦点移動が起こることが暗示されている。コンパクトな論考ではあるが時代的制約のなかで、社会科学史の総括と歴史構想の方向づけを試みた定義であると言える。

N.B.

類例としては、ヘーゲル精神現象学のEinleitung、パーソンズのSSA。少し異なるが、ニスベットのユニット・アイデア論なども。

その後、消費者市民社会、情報市民社会、グローバルな市民社会の構造と倫理を探求する調査や理論、「前向き」の言説が提示された。朝日新聞の論壇時評で村上の論文をとりあげた見田宗介は、その後情報消費社会を肯定的に論じた問題作『現代社会の理論』(岩波新書 1996)を出版した。これに対して、後藤道夫はいちはやく問題状況を、日本型大衆社会として批判した(後藤2001)。格差社会、不況、強権政治、政治の退嬰を批判し、対抗的階級の民主的組織化をめざす議論であった。

こんにちでは、政治、経済、文化の深刻な劣化を冷徹に見つめ、活路を断念し、判断構造の問題はAIに任せろと主張するデータ科学者も登場している(成田2022)。この議論を、大衆化に対する毒のある状況認識として読むこともできるだろう。

1.3. 社会学的想像力の再構成論をめぐって

さて、『社会学的想像力』は、大衆化と向き合う——もしくは向き合わない——社会学を批判し、自らの方法論を提示した著作である。松村一志(2022)は、社会学的想像力の限界を指摘し、再構成が必要である、と提起して、注目をあつめた。なぜ再構成は必要か。社会の社会学化、社会学の常識化のため、社会学的想像力を定義する社会の構成単位、区分などが無効化しているからである。そして、言表と言説を焦点にして区分や単位を洗い直すことで、社会学的想像力を再定義することを提案している。これを、ルーマン(Niklas Luhmann)、ラトール(Bruno Latour)といったコンテクストを展望、総括する、学説史、思想史の提案として見ることもできると思う。

N.B.

社会学の凡庸化は、異化媒介的契機の喪失であり、社会学的想像力の問題が提起されており、一方、既存の単位や区分の無効化の指摘により、社会学的想像力の問題が提起されているように思った。

大衆化＝非構造化という読み替えが可能だとして、その合理性を視野に入れたラディカルな分析性のなかで、社会学的想像力のユニット・アイデアを考えることが示唆されているように思った。

示唆に富む論考である。単位、区分の無効化というと大衆化＝非構造化が想起される。社会学の常識化というと、公共社会学——平たくいえば「誰でも社会学」——の問題との接合も考えてみたくなる。ケネス・バークとミルズについても再検討が必要かもしれない。

しかし、それはここでの課題ではない。むしろ、そうやって「使う」ことで、抜け落ちてしまうものを拾い集めて、ミルズの議論を再検討してみたい。そして、そこからアメリカ社会学史研究について考えてみたい。

N.B.

村上泰亮「ゆらぎのなかの大衆社会」『中央公論』1985年5月号。

後藤道夫『収縮する日本型“大衆社会”——経済グローバリズムと国民の分裂』旬報社 2001

成田悠輔『22世紀の民主主義 選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』(SBクリエイティブ)2022

松村一志「方法を理論として読む—社会学的想像力のフロンティア」(『現代思想』2023年1月号)2022。

本報告は、以上の問題意識をベースに、伊奈2023他これまで書いてきたものを抜粋、要約し、そこで論じたりなかったことを追補、説明したものである。ミルズ研究の状況を整理することから報告をはじめたい。

N.B.

伊奈正人「C. ライト・ミルズの政治的公衆論再考：社会学的想像力と歴史的特殊性を中心として」

『東京女子大学紀要論集』73 (2), 57-81, 2023-03-30

<https://qr.paps.jp/05KFT>

2. 公共社会学から「ミルズ・スタディーズ」へ——ミルズを「使う」かたち

2.1. 史料研究

C. ライト・ミルズの著作は、各国語で版を重ねている。ミルズ研究も、地道に発表されている。テキサス大学歴史センターの史料が整えられて以降、20世紀初頭から中葉の歴史との関わりで、さまざまな事実が解明されてきた。いろいろな伝記研究が出版され、また、キューバ、南アメリカ、東欧、北アイルランドの歴史との関係で、興味深い研究が展開されている。昨年末、米国国立公文書館の文書が公開されたこともあり、こうした歴史研究はさらに深められてゆくはずである。

N.B.


遺稿を編集したホロヴィッツ(Irving Louis Horowitz)、史料研究の先駆者であるギラム(Richard Gillam)、ラディカルな知識人としての交流を持つアロノヴィッツ(Stanley Aronowitz)の著作、史料研究を継承したサマーズ

(J.H.Summers)らの論文、史料を使ったギアリー(Dan Geary)の著作など注目すべき仕事がある。トレビノ(A. Javier Treviño)は、キューバ革命や東欧の動向について、史料調査や聞き取り調査による成果をあげている。

トレビノの著作

A. Javier Treviño, *C. Wright Mills and the Cuban Revolution An Exercise in the Art of Sociological Imagination (Envisioning Cuba)*, The University of North Carolina Press, 2017

サマーズの講演

 CUL: C. Wright Mills Lecture by John Summers at Columbia University

2.2. ミルズ社会学研究と公共社会学論争

一方、社会学でも地道な研究が続けられてきた。この間、英米西語圏はもちろん、独仏伊語などでも研究書が公刊され続けてきた。

冒頭でも述べたように、従来より、ミルズの著作については、「初学者向き」のもの——これも「誰でも社会学」か？——とされる傾向がある。動機論や権力論などの専門的な論考で言及されることがあっても、ミルズの用語やコピー、洞察などに一言される程度で、ミルズ社会学の展開は十分に行われてこなかった。そして、極言すれば、ミルズ社会学史的な位置づけは、いい意味にも悪い意味にもゆらがない。

ミルズが、一躍注目されたのは、公共社会学をめぐる論争がきっかけである。論争はブラウオイ・モデルにもっばら議論が集中していたようにも思われる。このことについて、伊奈2023では冒頭で次のように書いた。

「マイケル・ブラウオイ(Michael Burawoy)の米国社会学会講演(2004)をきっかけにして、いわゆる公共社会学論争が起こった。C.ライト・ミルズが再注目され、「社会学者が人々に届くことばで社会学を語ること」が議論された。社会学の存在理由を、学会として、再点検する意味はあったかもしれない。しかし、ミルズが遺した公共社会学の実質は、これにより、かえって見えにくくなったようにも思われる。」(伊奈2023, p.57)

ミルズ社会学を内在的に検討する必要があるだろう。とはいえ、「誰でも社会学」とどう向き合うか——初学者や市民の教育のためか、凡庸な常識を異化するためか——という問題を焦点化した論争の功績は大きいように思う。

N.B.

ブラウオイの論考

Michael Burawoy, “For Public Sociology” *American Sociological Review*, 70, 2005.

公共社会学については、拙稿「公共社会学の現代的条件: プラグマティズムと「公衆との対話」」『成城大学社会イノベーション研究』(矢澤修次郎教授退任記念号), 10(1), 2015を参照。

[公共社会学の現代的条件: プラグマティズムと「公衆との対話」\(矢澤修次郎教授退任記念号\)| CiNii Research](#)

2.3. ミルズ・スタディーズ

一昨年には、ミルズ研究のリーダーたちが、「ミルズ・スタディーズ」を掲げる著作を出版した。

著作タイトルには、「ハンドブック」という文言が用いられている(シリーズ名かもしれないが)。すべてがすべて、「誰でも社会学」風の論考がならんでいわけではないが、そうした要望にこたえる配慮は一定うかがえる。たとえば、ジョン・エルドリッジ(John Eldridge)は、ミルズ流の想像力活性化について解説している。しかし、そこには、社会科学の古典に通じ、ミルズを内在的に読みこなしてきた研究者の深い洞察があるようにも思われる。

N.B.「ミルズ・スタディーズ」のハンドブック。磯直樹会員にご教示いただいた。

John Frauley, ed., *The Routledge International Handbook of C. Wright Mills Studies*, Routledge International

「ミルズ・スタディーズ」に寄稿した論者のなかで、報告者がとりわけ注目するのは、第1に、このエルドリッジである。エルドリッジ(John Erdridge)は、ミルズの政治的公衆の概念に着目した研究者である。ミルズ公共社会学の核となるのは、この政治的公衆(political public)論であると報告者は考えている。ところがミルズは、1940年代後半ころから政治的公衆論からは離れた、とされてきた。実際、テキストに文言は見当たらなくなった。

しかし、ミルズの諸論考を内在的に検討することで、冷戦期、イデオロギー的に固定された評価を質し、公衆の政治/政治的公衆の考え方を再構成することができるのではないか、と思われる。そして、それにより、「ハンドブック」を支える洞察もあきらかにできるように思う。

N.B.

政治的公衆の再構成という知見は、中村好孝(「公衆のための社会学」一橋大学修士論文、1999)および後述の高橋肇の諸論考から学んだ。中村の議論は、エルドリッジの知見によっている(John Erdridge, *C. Wright Mills*, Routledge, 1983, p.44)。中村は、公衆の社会学の考察に歴史的特殊性概念を用いている。この点は伊奈正人・中村好孝、『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の観点から』(世界思想社、2007)の10章を参照。エルドリッジや中村は、ミルズの語彙や文体の変化を考察している。本稿はこれに対して、一貫したミルズ像を再構成しようとしている。

第2に、報告者が注目するのは、ジョン・ブリューワー(John Brewer)である。ブリューワーは、英国社会学会の会長も務めたアイルランド、ベルファストの社会学者である。同書には、平和過程(peace process)をキー概念とした公共論を書いている。社会学的想像力の観点から、南アフリカ、アイルランドをはじめとする和平の構築過程を考察した論考を踏まえたものである。

そこで、歴史的特殊性(historical specificity)の概念に注目しているのが、ブリューワーに注目する理由である。では、なぜ歴史的特殊性が重要なのか。第一に、この概念が、政治的公衆を再評価するために必要な社会科学史のイシューを開示するからである。第二に、この概念は、社会学的想像力の諸契機を媒介し、一貫する視点としての政治的公衆の再構成に道を拓くからである。

1940年代に用いられていた政治的公衆と1950年代後半以降用いるようになった歴史的特殊性と言う二つの論点を関連づけて解釈をすることで、ミルズに一貫した視点を再構成することができ、そしてそこからアメリカ社会学史の視点を考えることができる、というのが本報告の仮説である

N.B

歴史的特殊性概念についても中村好孝から学び、共著『社会学的想像力のために』(世界思想社、2007)の副題にした。

John Brewer. *C. Wright Mills and the Ending of Violence*, Palgrave Macmillan, 2003
John Brewer, *Peace Processes: A Sociological Approach*, Polity Press, 2010.

政治的公衆 初期の用語

歴史的特殊性 後期の用語

→社会学的想像力を丁寧に読解することで、初期から後期に至る統一的視点を析出できる
=ミルズの「使い道」

『社会学的想像力』

公共社会学の著作

政治的公衆論をスペシフィックに論定した、

社会学史の著作

世界史の焦点移動の省察 未来構想

3. ミルズ社会学の論点

3.1. 2つのミルズ像

ミルズ社会学の研究論点は、多種多様である。会員には周知のことかとは思いますが、念のためそれを確認することからはじめたい。一応三つに時期区分して列挙しておく、次のようになるだろう。

初期

自我論 動機の語彙論：社会学とプラグマティズム
ガスとの共著、共訳

中期

調査研究：プエルトリカン・ジャーニー 労働者調査
階級三部作：労働者階級 ホワイト・カラー パワー・エリート

後期

社会学的想像力
国際社会論と比較社会学

初期の動機の語彙論などを評価する研究者は、中期以降の批評やマルクス主義とのスタンスについては、否定的な評価を下す。一方、中期、後期の社会構造論や国際社会学を評価する人は、初期の著作には否定的な評価を下す。

ミルズを「使う」方向性はいろいろあってよいと思う。上でも述べたように本報告は、全著作を通して「使う」ことで、一つのミルズ像を再構成し、学史の視点を提起しようとするものである。そのためには、著作全体を俯瞰する視点を定める必要がある。これまでの内外の研究成果を踏まえ、初期、中期、後期の仕事について整理しておきたい。

3.2. 初期ミルズ

3.2.1. 社会心理学と知識社会学

初期の論考として、論じられてきたのは、次の論考である。

Mills, "Language Logic and Culture" American Sociological Review, vol.IV, no.5 (October) 670-680 1939
→1963 Irving.L. Horowitz, ed., Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills, Oxford University Press, 423-438. (=1971, 佐野勝隆訳「言語、論理、文化」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、334-344。)

—————, "Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge" American Journal of Sociology, vol.XLVI no.3 (November) 316-330, 1940→1963 Horowitz, ed., Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills, Oxford University Press, 453-468. (=1971, 田中義久訳「知識社会学の方法論的帰結」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、356-368。)

—————, "Situating Actions and Vocabularies of Motive," American Sociological Review, vol.V (December):904-913, 1940→1963 Horowitz, I.L. ed., Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills, Oxford University Press, 439-452. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、344-55。)

議論されてきた論点は次の通りである。

プラグマティズムの社会学化 = 一般化された他者概念の修正 選択された社会構造の部分

動機の語彙論 = 動機外在説 動機付与論

知識社会学の社会心理学化 = 動機論を核とした生活、知識などのシームレスな対象化

プラグマティズム批判 = 公衆論の批判 哲学の改造に対する異議

一般化された他者の概念修正について、ミルズは明確に「ミードと異なる」と言っている。同様の見解は、ケネス・バーク(Kenneth Burke)の著作にも見られるものである。

バークは、ミルズの動機論にも影響を与えている。ただし、この時期のミルズの動機論には揺れがある。ヴェーバーの内在的動機論も同様の観点から評価しているし、パーソンズのSSAを

フランスにあげている。それでも、バークの著作、とりわけ次の著作——今日の社会学にも影響を与えている著作——は、ミルズが生涯にわたって引用し続けたものである。

Burke, *Permanence and Change*, New Republic, 1935→1954, University of California Press.

N.B. 主だったバークからの影響

動機論

“Perspective by Incongruity” 批評の方法 社会学的想像力の着想

ミルズのプラグマティズム批判は、社会全体を包摂する公衆コミュニティの存在を異化したものであり、それゆえ上記の修正が必要となったというふうに解釈されてきた。

プラグマティズムは、宗教倫理に裏付けられた合理的なコミュニティが直面する工業化と不況という問題に、問題解決の知を提起し、学問や公衆を改造しようとした。(付言すれば、それは、分析的なツールとの接合によって、問題解決のパラダイムを精緻化すること[もしくは問題解決の定義を分析的に変換すること=知の工学化? 戦略化?]にも貢献した。)

これをミルズは批判した。

なかでも重要な論点は、ミルズの言語論的な動機論が「再発見」され、評価された。

N.B.

Scott, M. B. & Lyman S.M., “Accounts,” *American Sociological Review*, 33 (1): 46-62, 1968.

Blum, A.F. & McHugh P. “The Social Ascription of Motive,” *American Sociological Review*, 36 (1): 98-109, 1971.

エスノメソドロジーとの対照も行われた。

山田富秋「エスノメソドロジーの論理枠組と会話分析」『社会学評論』32 (1), 64-79, 1981

・ プラム＝マヒュー以降の議論は、ミルズに一言し、語彙分析の着想を体系化するものとなっている。これに対して、井上俊や西川珠代は、ヴェーバーやデュルケムなどの議論との比較検討を行っている。いわゆる動機外在説、動機付与論を定礎しただけでなく、社会科学の古典を踏まえた社会学史的な展望を拓いた点で、重要な業績であると考えられる。なお残るのは、アメリカ社会学史の展望との対照である。

N.B.

井上俊、「価値と制度————聖一俗理論をめぐる」浜島朗編『社会学理論』(社会学講座2) 東京大学出版会, 1975.

井上俊、「動機と物語」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学1 現代社会の社会学』岩波書店, 1997.

井上俊「動機のボキャブラリー」『自己・他者・関係 (社会学ベーシックス1)』

世界思想社, 2008.

西川珠代、「社会学における『動機』概念の変容——ウェーバーの動機理解と『動機の語彙』論の動機付与」『ソシオロジ』36 (1), 1991.

初期ミルズで本報告に重要な論点は次の2点である。

1. ミルズが提起した“sociotics”はどうなってしまったのか。
2. ミルズの最初の論文は、なぜ「言語、論理、文化」と題されたのか？

1. ミルズは、チャールズ・W・モリス(Charles W. Morris)の記号論をベースに、pragmaticsの社会学次元を sociotics として提起している。これを知識社会学の基礎に据えるプランが提示されている。その体系的展開は十分になされたとは言いがたい。しかし、『社会学的想像力』でこの考え方が用いられているように思われる。
2. アメリカ社会学における知識社会的な視点を、自覚的に定式化しようとした論文。定式化は、社会心理学的な視点から行っている。

“apperceptive mass”のような思弁的概念を設定することなく、思考のモデルをつくる

: Why から How へ 動機論の着想
原基的なもの 派生的構造
価値 社会構造

エートス
潜在的なもの 顕在的なもの

文化 論理 : 言語

などを対比。これを言語を手がかりに考えてゆくことの提案。

N.B.

ことばの使用において、潜在的な価値の次元が持ち込まれていることについては、ケネス・バークがひかかれている。「名詞は見えざる形容詞をともないがちであり、動詞は見えざる副詞を伴いがちである。」(Burke, op.ci. p.233-234)

また、中国語彙における価値次元については、マルセル・グラネの知見を引用している。これについては、別の論考をミルズは書いている。

3.2.2. ガースとミルズ

ハンス・ガース(Hans Heinrich Gerth)との関係で重要な論点を列挙しておく。

ウィスコンシン大学で評判が悪かったガースの授業をミルズは絶賛した。ミルズの学位論文の指導教員はガースではない。出会いはラストイヤー近くである。しかし、共著『性格と社会構造』やヴェーバーの共訳を出版している。

前者はガースの講義ノートをベースにしたもの。出版事情で公刊が遅れた。後者はミルズは英語校閲者という位置づけ。ミルズは抜群の交渉力で商談を進めた。争いはあったが、ガースもデニユアがかかっていた。翻訳などは、ミルズによりニューヨーク論壇に紹介されている。『パワー・エリート』についても、共同作業の着想を活かしているとガースは語っている。

ミルズの初期の論考は、あらかたテキサス時代に執筆されている。うち2つはテキサス時代に学会誌に受理。知識社会学その他については、パーソンズの師(アーマスト時代)でもあるクラーク・エアーズ

(Clarence E. Ayres)に学ぶ。動機の語彙論については、この時代の成果である。『性格と社会構造』において、「動機づけの社会学」となっている。凡庸化という評価も。動機外在説の論考で、『性格と社会構造』しか引用していないものもある。

この報告で重要な論点

媒介原理論は、ガースによるところは大きい。ただし、ミルズはマンハイムをテキサス大学時代に読んでいた。パーソンズの価値と構造の論定を場合として含む類型化

媒介原理のユニット・アイディア
価値と構造 原基と派生 CF 言表と言説

“sphere”の概念
ヴェーバーの翻訳でもインデックスに
ドイツ語でも同じことば
シンボル 教育 地位 テクノロジー
社会構造の自律化しやすい部分。

権力＝強制論

N.B.

パーソンズはアーマスト・カレッジでエアーズに学んだ。パーソンズが操作論の立場から、ヴェーレンの本能論を決定論と批判したことについては次の論文を参照。Talcott Parsons, “Sociological Elements in Economic Thought”, *Quarterly Journal of Economics*, 49. 1934.

N.B.

ガースとミルズについて。

Guy Oake & Arthur J. Vidich, *Collaboration, Reputation and Ethics in American Academic Life: Hans H.Gerth and C.Wright*

Mills, University of Illinois Press. 1999の他、
Daniel Geary, *Radical Ambition: C.Wright Mills, the Left, and American Social Thought*, University of California Press, 2009

3.3. 中期ミルズ

中期以降の重要論点については、4以降で詳述する。ここでは箇条書きで論点を確認しておく。

3.3.1. 階級三部作

アメリカ社会の組織化＝価値と構造変動を問題にする著作
アメリカ公衆社会の核となる価値としての宗教道徳
それを実現する政治的なコミュニティ
これらの変貌について調査によって明らかにした。

労働者階級

政治的組織化について調査によって確認
政治的公衆＝公衆の政治性は存在しているが
リーダーはエリート
組織化の新しいフェイズに組み入れられていることを描く

中間階級

カウツキーとベルンシュタインの論争 階級分解か独自の組織化か
→独自の見解 大衆化や少数者の支配を視野に入れた組織化の類型論

パーソナリティの市場論
中間階級のプロレタリアとしての教育者

権力エリート

アメリカ社会の大衆化
少数者の支配の変貌
権力支配によってアンダー・コントロールできない現代社会
制御も支配もできない
権力＝強制論ではあるもののフェイズが異なる

→これを視野に入れた、イデオロギーとユートピアの類型化
知識社会学と社会学史

3.3.2. 調査研究と応用社会調査研究所

マートンとの関係

マートンがミルズをコロンビア大学に招聘した。
マートンの門下生はミルズは統計などろくにわかっていなかったと語った(久慈利武先生)
マートンはミルズの夭逝を惜しみ、人物を評価していた(石川実先生)

ラザースフェルドとの関係

労働部門の調査などを任される
ディケーター (Decatur)調査にも関わっていないこともない
『社会学的想像力』で批判しているが、人物学識については敬意が払われている。
第2世代については私怨が書き連ねられている。

プエルトリコ調査、労働調査→若手の協力を得ている。後者も共著。
ホワイトカラー調査 パワー・エリート調査
ルース・ハーパーの助力

後述するようにミルズは計量調査を否定していたわけではない。
「使い方」による

同様に歴史の「使い方」についても、歴史的であればいいわけではなく、社会構造論についても同様のことが言える。

N.B.ラザースフェルドとの関係について。

John H. Summers “Perpetual Revelations: C. Wright Mills and Paul Lazarsfeld”
The Annals of the American Academy of Political and Social Science, Nov., 2006,
Vol. 608, *Politics, Social Networks, and the History of Mass Communications Research:
Rereading Personal Influence* (Nov., 2006), pp. 25-40

Jonathan Sterne “C. Wright Mills, the Bureau for Applied Social Research, and the Meaning of Critical
Scholarship” *Cultural Studies ↔ Critical Methodologies*, Volume 5 Number 1, 2005 65-94

この他、Geary op.cit.などにも詳しい。

北田暁大によるラザースフェルド研究、デュボイス研究、それに基づいたアメリカ社会学史の見直し、
そのもとになっている奥村隆のラザースフェルド論など、注目すべき研究であると考える。

アメリカ社会の積極性の評価
計量的調査の批判的活用をめざすコンテキストの再評価

N.B.

北田暁大「社会学にとって『アメリカ化』とは何か————ポール・ラザースフェルドと『アメリカ社会学』『現代思想』42(16): 150-63,2014.

奥村隆「亡命者たちの社会学————ラザースフェルドのアメリカ／アドルノのアメリカ」
『応用社会学研究』55号 2013.

3.4. 後期ミルズ

3.4.1. 社会学的想像力 実質的には中期の著作

主に50年代中葉に書かれた論考(リベラル・エデュケーション論、ミクローマクロ論、知的職人論など)を再編集したものである。知的職人論を見ればわかるが、『パワー・エリート』執筆に、考え方が活かされている。

内容については後述

3.4.2. 世界戦争論とマルクス主義論など

パワー・エリートの図式を活用して、東西冷戦を論じた。
マルクス主義への接近が議論された。

主体性論争と歴史的特殊性
史的唯物論の修正を行ったカール・コルシュ(Karl Korsch)『カール・マルクス』の影響
西欧のマルクス主義者との交流

3.4.3. 未完の業績

国際比較社会学
『文化装置』というタイトルだったと複数の研究書にある。

未来構造に向けた収斂や総括を論じるのではなく、
「都合の悪いもの」=非構造化や少数者の合理性も視野に入れた類型化
「別でもあり得たこと」の点検

ミルズに一貫する視点

価値と構造の類型論としての媒介原理論
科学と日常をシームレスに問題化する知識社会学
それを社会心理学的に定礎する動機論
工業化にともなう公衆と公衆社会の変貌という現状認識
大衆社会モデル

⇨政治的公衆と社会学的想像力

大衆化の払拭ではなく、類型化と点検。
動機論と媒介原理論

→自己論から比較社会学まで
日常的知識から科学的知識まで

4. 政治的公衆と歴史的特殊性——スペシフィックな想像力

4.1. 政治的公衆論

ミルズにおけるポジティブな契機として、しばしば言及されるのが政治的公衆論である。『新しい権力者』に出てくる用語である。本書は、アメリカにおける労働者の組織化についての調査研究である。

西欧マルクス主義は、より先進的な西欧社会をベースに、マルクス主義を再解釈しようとした。これに対して、ミルズが考察したのは20世紀のアメリカ社会である。

N.B.

(西欧?)マルクス主義への接近という評価は、近代の社会学者のアメリカ評価をどう解釈するのか?
:徹底的に合理的な宗教コミュニティに基づいた工業化の展開

宗教を核とした合理的なコミュニティをベースに、バージョンアップすることで工業化を達成しつつある社会を、トクヴィル、デュルケム、ヴェーバーにも注視した。そこにアメリカ社会科学の自負はあった。ヨーロッパから、経済学、社会学、哲学などを輸入し、核となる価値と分析的な論理に基づく独自の問題解決思考が模索された。それにより、コミュニティに生きる活力ある公衆のバージョンアップも模索された。

対して、ミルズは、こうしたバージョンアップで状況がアンダーコントロールできるということに懐疑的だった。『新しい権力者』では、アメリカ社会における労働者の組織化を、ファシズムと社会主義の現状をつぶさにした西欧マルクス主義とも異なる視点から考察した。

ミルズは、左翼の類型を提示している。そのひとつが、政治的公衆(**political public**)である。これは、“**mass public**”(中村好孝訳「一般市民」)と対をなす用語であり、『パワー・エリート』の公衆と大衆モデル着想の原型とも言われている。こうした類型論のポイントは、さまざまな偏差を描出することであり、ポジティブな変革主体の萌芽を論定することではない、と考える。すでに述べたように、むしろ、労働者階層においても、大衆化が進み、組合リーダーがエリート化しているという判断が、この著作の主要な論旨ではなかったか。**(よりどころの合理性と問題性＝両義性の点検)**、

N.B.

John Eldridge *C. Wright Mills*, Tavistock Publications, 1983,
中村好孝「公衆のための社会学」一橋大学修士論文、1999.

ミルズが一つ一つ概念を洗いだして、類型化している議論は率直に言って退屈である。むしろ問題点を点検し、歴史的、学説史的な洞察を示す点に醍醐味はあるように思う。

『新しい権力者』(1948)では、ミルズは、「政治的公衆」(political publics)と「一般市民」(mass public)という区別を使っている。この二分法も、のちの公衆概念と大衆概念に引き継がれていると考えてよい。

後者の一般市民は、安定した考え抜いた政治的見解をもっておらず、漠然とした道徳的判断をする可能性の方が高い。一般市民は、多くの条件によって影響を受ける。一般市民の労働組合指導者についてのイメージは、政治的公衆の発言から、あるいはマスメディアから、あるいは労働組合についての本人の直接の経験から、影響を受ける(NMP:31-32:30-31)。

しかし、より価値があるのは、前者の政治的公衆についての議論である。エルドリッジは、『新しい権力者』の政治的公衆論を、「洗練と発展の余地があるのは確かだが、おそらくミルズの著作のなかの公衆についてのもっとも実りある議論である。」注 と評価している。

政治的公衆は、政治問題について鋭く継続的な関心をもっている。かれらは原則や理念をもち、その観点から事件や政策について見解を述べる。政治的公衆は、読んでいる出版物や支持組織によって位置づけることができる。それらの資料によると、アメリカにおける政治的公衆は少数である。ミルズは、アメリカの政治的公衆として、極左、独立左翼、自由主義的中道派、共産主義者、実際の右翼、洗練された保守の、6種類を分類している(NMP:14-26:13-26)。

極左(The Far Left)は、最も体系的な見解をもつ公衆である。社会主義の勝利を求め、独立した労働者階級の行動を要求する。信念とエネルギーはあるが、ヴィジョンはない。年齢は若く、都市に多い。

独立左翼(The Independent Left)は、左翼に寄生している。ヴィジョンが多すぎ、組織された意思がない。いまはパースペクティブの再考の時であり、行動の時ではないと考えている。専門職や知識人が多く、他の左翼にとつての検閲官である。

自由主義的中道派(The Liberal Center)は、つねに新しい対象に短期的に憤る。その考えは、第一次世界大戦以前から進歩していない。労働組合を最も支持する公衆である。主に新・旧の中流から構成される。

共産主義者(The Communists)は、現在は親ロシア派であり、一つの党に集結している唯一の公衆である。30年代には知識人たちが加わっていたが、現在の中核は、大都市の中流下層である。

実際の右翼(The Practical Right)は、実際には経済の方により関心をもつ政治的公衆である。一般市民の支持をかちとるために、自由主義的中道と争う。イデオロギー的には資本主義を擁護しており、かつての黄金時代を熱望している。かれらは、政治的公衆の中で最大であり、組織されており、地位のある人々である。中小の企業家からなる。

洗練された保守(The Sophisticated Conservatives)は、エリート集団内で活動しており、広い人々は相手にしていない。主な潮流は自分たちのものであると信じているので、静かに目的を実現する。労働組合と単純に敵対する実際の右翼と異なり、洗練された保守は、長期的観点から、協調主義の労働組合を確保しようとする。また、経済的観点から政治を行う実際の右翼と異なり、洗練された保守は、政治的観点から経済的サービスを支払う。」(中村 30-31)

4.2. 権力論争

階級三部作は、労働者、中間階級、権力エリートの組織化について、さまざまな可能性を視野に入れて、描き出した。

とりわけ論争的であったのが、『パワー・エリート』である。この著作をめぐる論争は、自由主義的な民主主義のゆくえ、大衆化に対する評価と処方と関わっている。非合理的な扇動も辞さない秩序が政治的選択肢の1つとしてクローズアップされ、ファシズムが顕在化した。そして、社会主義の計画思想という選択肢、ケインジアン的な政治経済モデルという選択肢、自由主義の保守する選択肢が比較された。それは、社会主義的な社会科学の自負にも、アメリカの社会科学の自負にも、真っ向から挑戦するとも言えるものであった。

論争の構図を、論争を整理したドムホフもミルズに対する批判を三つに分けている。3番目は実質保守的な批判であるが、ミルズはスタイル面に注目している。伊奈は、保守的を加えて、4分類にしているが、これは原著とは異なる。

リベラルな批判 制御論 多元的公衆の改造
ラディカルな批判 支配階級論 変革主体の組織化
(保守的な批判 伝統・慣習)
ハイブラウな批判 貴族主義的な大衆論

こうした整理は、ミルズの学史的パースペクティブの総括であり、知識社会学の方法がフル活用されているものであるように思われる。その要となっているのは、再三確認してきた価値と構造の媒介原理論と動機論(社会学的想像力の再検討という文脈では後者に一本化?)である。あらゆるよりどころを相対化して類型化するミルズの知識社会学的視点を確認することもできる。(少数者の支配、あるいは非構造化も、一類型としての合理性を持つことにもなるかとは思う。)

今日的な視点から見れば、個人と社会、価値と構造という概念設定自体が、無効化しているとも言えるのかもしれない。実際、言語論的な視点、分析的な視点は、ますます徹底化されているし、それに基づいた社会学的想像力の拡張再定義を主張する議論も現れたことは冒頭で見たとおりである。

N.B.「よりどころのない立場」アプセーカーの評価。

Herbert Aptheker, 1960, World of C. Wright Mills, Marzani and Munsell, 1960(陸井三郎訳、『ライト・ミルズの世界』青木書店、1962)

N.B.

権力論争の構図 詳説

『パワー・エリート』を批判した社会科学は、通常四つに整理される。第一は、リベラルな社会科学である。ヨーロッパの古典を踏まえ、社会設計、社会計測のツールを生み出した。工学的な発想に立って、大きな政府・消費経済という需要サイドの経済思想を補填することで、権力集中、欲望の暴走を制御し、コミュニティを核とした多元的民主主義を改造し、制御することが可能であると判断した。

第二は、ラディカルな社会科学である。マルクス主義の考え方に立ち、政治、経済、軍事の支配階級が一元化し、独占状態にあることを批判する。社会主義に向かう運動をラディカルに組織化することで、制御された計画社会を実現できると判断していた。

第三の批判は、保守的な社会科学である。それは、リベラルなものにせよ、ラディカルなものにせよ、人為的に制御をめざす社会科学、そのイデオロギーに疑義を提出する。そして、時代をくぐり抜けてきたコミュニティの伝統、道徳の原理的保守だけが、社会秩序の根拠たり得ると判断した。

第四はハイブラウな社会科学で、人々の実感に訴えるミルズのスタイルの対極にあり、洗練されたことばの精神性が新しい秩序規範の根拠たり得る、と判断した。

四つはそれぞれのやり方で、権力、欲望、軍事の暴走を制御する根拠を示している。しかし、こうした「よりどころ」を提示し、アンダー・コントロールを宣言することよりも、暴走のリスクとメカニズムを考察することが大事なのではないか。ミルズは、近代民主主義が切り捨ててきたもの、ふたをしてきたものを、注意深く見つめた。少数者の支配もその一つである。迷うことなくエリート概念が採用され、集中する権力の制御不能が描き出される。パワー・エリートは旧来の人格的な存在ではなく、それを呑み込むクールで放縦な巨大機構の機能的部分である。

N.B.

G. William Domhoff and Hoyt B. Ballard eds., C. Wright Mills and The Power Elite, Beacon Press, 1968.

伊奈「文庫版解説」C. ライト・ミルズ『パワー・エリート』ちくま学芸文庫、2020

補遺:ミルズの個人史と『パワー・エリート』成立史のラフスケッチ

伊奈2013より（注も含めた長い引用）

「ミルズの伝記研究の多くは、時代の変動を目の当たりにしてミルズが成長したことを描いている。18 ミルズは、地域コミュニティの変貌のなかで成長した。ガンファイトに倒れた祖父とホワイトカラーの父、カウボーイのテキサスと産業主義のテキサス、小さな田舎町と巨大化する産業都市を照らしあわせた。ミルズは前者に愛着を持ち、後者に反抗的な態度をとったという。それらに、ヨーロッパのファシズムがコミュニティの核となる中間集団を破壊したこと（Gleichschaltung＝平らにならす強制的な均質化）を重ねたのが、『パワー・エリート』である。

『パワー・エリート』は、家族、学校、教会を核とした米国のコミュニティの変貌について論じることから始まっている。こうした変化は、米国のごくふつうのまちのごくふつうの公衆ならば、感じてきたことであるはずである。ここに訴えかけるのが————政治的公衆の条件を問う————ミルズ社会学の戦略であった19。

他方で、ミルズの問題提起は、社会科学の古典的な問題を再検討するものであり、民主主義、産業主義への省察をうながしているものである。それは、米国の社会科学の自負、そして社会主義的な社会科学の自負に、真っ向から挑戦するものであった。ミルズが問題化した無軌道な政治経済社会のアンダー・コントロールは、こんにちに至るまで論じ続けられている。

20世紀中葉の米国社会科学は、確固とした自負を持っていた。すなわち、ヨーロッパの社会科学は、近代産業主義の発展に見合った社会の改造案を提示できないまま、ファシズムや社会主義と向かいあっている。これに対して、米国の社会科学は知の改造によって、多元的な民主主義に基づいた新しい産業国家を建設しうると。米国の秩序と繁栄は、それ以前からも、ヨーロッパの社会学者から注目されていた。M・ウェーバーをはじめヨーロッパの社会学者が米国を訪れ、宗教を核にした堅固なコミュニティのうえに、産業化が進んでいることに注目した20。

米国の社会学者のなかには、ミルズがつぶさに眺めたコミュニティの変貌を直視していた者たちがいる。たとえば、リンド夫妻は「ミドルタウン（中西部のごくふつうのまち）」での参与観察に基づき、変貌するコミュニティを描き出した。T・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）は、産業の自律性が、欲望の暴走、消費の暴走によって制御不能になっていることを批判し、恐慌や世界戦争を予言した。ミルズは、こうした議論を、テキサス大学で経済学者エアーズ（Clarence E. Ayres）に学び、ガースの前では、ヴェブレンの洞察を、好んでウェーバーの社会学的分析を重ねたという21。

ウェーバーは、ヨーロッパの大衆社会化を予感し、徹底した合理化＝権力統制で暴走に対処しようとする一方、米国の秩序はヨーロッパと異なるものとして評価したとされてきた。こうした議論は、ウェーバーの配偶者（Mari- anne Weber）の評伝に詳しい。はたして、ガースとミルズの翻訳・解説も、この評伝に依拠して書かれている22。

米国経済の無軌道を批判したヴェブレンも米国社会の大衆化までは論じていない。社会制御、テクノクラシーの可能性を、「技術者のソヴィエト」と評価している。ミルズとガースが、ジェームズ・バーナム（James Burn- ham）を批判していることにも注意したい23。労働組合について考察したバーナムは、ヴェブレンにも影響を受けつつ、経営者革命論を展開したことで知られる。社会制御、マネジメントといった工学的発想は、社会システム、社会調査などの発想と同様、相対化される必要があるというのが、ミルズの考え方である。

ウェーバーもヴェブレンも、そして「冷戦期東西」の社会科学も、とらえることができないまったく新しい冷厳な権力機構の危うさ(その合理性 報告追補)をとらえるため、パワー・エリート概念が導入されることになった。米国社会を、ファシズム体制と比較し、権力集中、大衆社会というモデルでとらえようとする『パワー・エリート』は、大論争を巻き起こした。

17 C.Wright Mills, *The Power Elite*, Oxford University Press, 1956, (鶴飼信成・綿貫譲治訳『パワー・エリート』ちくま学芸文庫、2020)。Mills 1959 所収の、「知的職人論」は、ミルズの方法論の実践について解説したものであるが、そこで、『パワー・エリート』の執筆過程を例にして、議論が展開されている。

18 伝記研究の動向は伊奈前掲 1991、伊奈 2013、伊奈「文庫版解説」C.ライト・ミルズ『パワー・エリート』ちくま学芸文庫、2020などを参照。本節の記述は、文庫版の解説に加筆したものである。

19 そのこともあってか、ミルズは保守主義者からも評価を得ている。例えば、Robert Nisbet, *Sociology as an Art Form*, Oxford University Press, 1976, (青木康容訳、『想像力の復権』ミネルヴァ書房、1980)。

20 ヨーロッパと米国の社会科学の対比の詳細については、伊奈正人「ミルズ」『社会学史入門』(ミネルヴァ書房、2020)、徳永恂『現代思想の断層——「神なき時代」の模索』(岩波新書、2004)を参照。

21 雑誌 *The New Republic* にも関わったエアーズから、ミルズは、プラグマティズムやヴェブレンの社会理論だけでなく、ヴェーバーやマンハイムの学説を最初に学んだことは、テキサス大学で執筆した論文(注8)からもわかる。

22 Hans H. Gerth & C. Wright Mills eds. *From Max Weber: Essays in Sociology*, Routledge, 1948. ガースとミルズは師弟関係にはない。

23 Hans H. Gerth & C. Wright Mills “A Marx for the Managers” *Ethics* Vol. 52, No. 2

(Jan., 1942), 同論文は、ガース論集に所収 (Joseph Berman, Arthur Vidich, and Nobuko Gerth, eds. *Politics, Character, and Culture: Perspectives from Hans Gerth*, Greenwood, 1982)。ガース執筆の物象化論の論文なども目につく。

24 引用部分は、次の書物の論争整理に基づいている。G. William Domhoff and

Hoyt B. Ballard eds., *C. Wright Mills and The Power Elite*, Beacon Press, 1968.] (伊奈 **op.cit.** 2023)

4.3. 歴史的特殊性をめぐって——スペシフィックな語彙

4.3.1. 歴史的特殊性の概念

では、ミルズの方法論はどのような意味において重要なのか、そこからどのような社会学史的な視点がうかがえるのか。『社会学的思想力』を『パワー・エリート』などと照らしあわせながら、検討してゆこう。

個人史と歴史、トラブルとイシューといった区分は、常識化している、と言われる。役割概念が中心に据えられたガースとミルズの図式は、いささか洗練を欠いているように思う。では、こうした区分や単位を見直し、分析的な論理を探究した場合、原基てきなものと派生的なものとはどのように論理化できるのか。言表と言説という用語系の再構成という議論は重要なものであることは冒頭で認めたとおりである。しかし、社会学的思想力というアイデアはそこに解消できないようにも思う。

では、どんな議論が可能なのか。手がかりとなるのは、歴史的特殊性の概念であると考えている。それは、語用論を社会学化したというsociotics、政治的公衆論、公共社会学の問題に対する展望を与えてくれる。歴史的特殊性などというと、堅苦しくて分かりにくいところがある。「概念読み」にこだわると、ミルズのことばはわかりにくい。むしろ、スペシフィックと言ってしまった方がわかりやすくもある。どう訳したらいいかはよくわからないのだが、ミルズの他のことばもそんなところがある。そして、概念的な意味あいとかみ砕いた意味あいを兼ね備えた文言が、ミルズのことばの力動をつくり出しているようにも思われる。これは、これ以降の検討の仮説でもある。

さて、歴史的特殊性の概念は、『社会学的想像力』第8章「歴史の利用 (Uses of History)」において、説明されている。それは、マルクス(Karl Marx)の考え方として論じられている。ミルズは、歴史を利用することで、学問的探求の成果(分析や方法)を、超歴史的に一般化することを回避できると言う。すなわち、探究の妥当性を特定 (**specify**)し、事態が他にもあり得た可能性を比較することができる。「歴史の利用」とは、多様性を根拠に考えること、とされている。

「なにが説明されるべきか述べるときでさえ、それに必要となる射程を提示しうるのは、人間社会の歴史的多様性についての知識だけである。時代と社会が異なれば、ある特定の問い...(中略)...の答えも異なる。それは、問いそのものがしばしば定式化され直されなければならないという意味である。私たちは、社会学的な問題を適切に問いかけるだけでも、歴史によって提供される多様性を必要とするのであり、いわんやそれに答えるためにはなおさらである。私たちが提出する答えや説明は、いつもというわけではないが、しばしば比較の観点をとる。」(Mills 1959, p.147)

超歴史的な一般化、普遍化とは、危機(ファシズムや大衆化)の解決を、単一の決着、たとえば工学的な知の改造——「バージョンアップされた政治と公衆」の論定——に委ねることである。こうした「解決」は、危機をヨーロッパに限定し、米国の兆候に目を向けない、とミルズは批判した、そして、歴史的多様性をベースに、比較の方法を用いて歴史を往還し、社会事象をスペシフィックに捉えることが重要である、と「歴史の利用」を主張する。

「たった一つの社会を静的なものとして理解することさえ、歴史的素材を利用しなければ望めない。社会のイメージは、歴史特殊的なイメージである。マルクスの言う「歴史的特殊性の原理」は、第一に、いかなる特定の社会でも、それが存在する固有の時代の観点で理解すべきだという指針である。「時代」がどのように定義されるのであれ、ある特定の時代に一般的である制度、イデオロギー、男女の諸類型は、一つの独特なパターンのようなものを構成する。これは、そうした歴史的類型は他の類型と比較できないという意味ではないし、そのパターンは直感的にしか把握できないという意味でもない。その意味は、この歴史的類型のなかで、変動の多様なメカニズムがある独特な種類の交差をするようになるということであり、これが歴史的特殊性の原理の第二の内容である。このメカニズムのことを、カール・マンハイムは——ジョン・スチュアート・ミルにならって——「媒介原理」(**principia media**)と呼んだが、それこそが、社会構造に関心をもつ社会学者が把握しようとしているメカニズムなのである」(Mills 1959,p.149)。 傍線、太字伊奈。

N.B.

C. Wright Mills, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959,

『マルクス主義者たち』でも歴史的特殊性は説明されている。少し詳しく書かれており、レファランスマも示されているが、カール・マルクスの著作ではなく、カール・コルシュ(Karl Korsch)の『カール・マルクス』である。コルシュからの引用はこのうち第一の点についてである。

「(歴史的特殊性の原理は: 筆者補足)われわれに対して、特殊な時代の枠のなかで発見した法則性や傾向を定式化することを指示するとともに、この時代の限界をこえてそれを普遍化しないように注意をうながす。われわれは「あらゆる社会生活の普遍的条件」を研究するのではない。われ

われが研究するのは「今日のブルジョワ社会においてそれらがとるところの特殊歴史的な形態」である」(Mills 1962, p143)

N.B.

史的唯物論の修正を試みた論者のうち、ジョルジュ・ルカーチ (Lukács György) ではなく、コルシュであるのは興味深い。Karl Korsh, *Karl Marx*, John Wiley and Sons, 1938, (野村修訳『マルクスその思想の歴史的・批判的再構成』未来社、1967)。訳者の野村によれば、本書のテキストは3種類あるという。1936年の自筆ドイツ語版原稿、1938年公開のコルシュによる英語訳原稿、1947年から改訂がなされて、1950年に確定されたドイツ語原稿である。野村訳はこのうち第三のものを訳したものである。引用ページからして、1938年の英訳をミルズは用いている。

N.B.

C. Wright Mills *The Marxists*, 1962 Dell Pub. Co. (=1971, 陸井三郎訳『マルクス主義者たち』青木書店).

こうした議論は凡庸な多様性論、タクソミーとして切り捨ててしまえるものなのか？

4.3.2. 歴史のスペシフィックな利用

社会構造だけではなく社会変動についても同様の類型論、媒介原理論は応用されている。変動法則を定立しようとする議論についても、近代社会との対峙という論点と関連付けられ、妥当性が限定されている。

「初期の社会理論家たちは、社会の不変の法則——自然科学の抽象化された手続きが、「自然」の質的な多様性の下で共通している法則を導いたのとまったく同じように、すべての社会に当てはまる法則——を定式化しようとした。私の考えるところ、いかなる社会学者によっても、ある時代に特有の構造に関係しているものと理解してはならない超歴史的「法則」が明言されたことはない。他の「法則」は結局のところ、空虚な抽象であるか、あるいはまったく混乱したトートロジーになる。「社会の法則」やさらには「社会の規則性」の唯一の意味は、ある歴史特殊な時代のなかの社会構造について発見——そう言ってよければ構築——するような、「媒介原理」である。私たちは、歴史変動の普遍原理を知らない。私たちが実際に知っている変動のメカニズムは、研究している社会構造によって変化する。なぜならば、歴史変動とは、社会構造の変化、つまりその構成要素間の関係の変化であるからである。社会構造が多様であるのと同じように、歴史変動の原理も多様なのである。」(Mills 1959, op.cit. p. 150.)

さらに、「歴史的の利用」それ自体についても、歴史的特殊性の原理が適用・省察される。すなわち、時代や社会によっては、「歴史的要因」を参照する必要がない場合もある。

「簡単に言うと、歴史の重要性それ自体が、歴史的特殊性の原理の影響を受けるのである。確かに、「すべてが過去からやって来た」と言われるのが常かもしれないが、しかしその「過去からやって来る」というフレーズの意味が問題なのである。世界には、まったく新しいことが存在することもある。つまり、「歴史は繰り返す」し「歴史は繰り返さない」。それは社会構造と時代によるのであって、その歴史に私たちは関心をもつのである。」(Mills 1959, op.cit. p. 156.)

ミルズは、歴史的特殊性の原理は、心理学の対象としての個人史、“biography”にも適用される、と言っている (Mills 1959, op.cit. p. 163.)。制御する科学の確立によって知の改造が可能であるという知見に対して、歴史的な社会構造と人間の深層心理の問題が対置され、問題化が行われている。

社会構造の問題化も、歴史の問題化も、深層の問題化も、特殊な歴史状況によって相対化、類型化される。社会学的な想像力を定義する区分、単位も、常に見直されるものである。社会学的想像力を定義するさまざまな単位や区分が、常識化、凡庸化しているという状況認識を説明しているようにも思われる。より重要なことは、スペシフィックな思考をより具体的に論じてゆくことだろう。

4.3.3 . スペシフィックな明視化: 概念と実感——ミルズにおける方法の問題

これだけだと、史的唯物論の修正をして、マンハイムに接続しているだけのようにも見える。では、スペシフィックなものとは何か。『パワー・エリート』を手がかりに考えてゆこう。

パワー・エリート論は、社会学的想像力の方法を駆使して書かれたものである。そして、リベラル、ラディカル、(コンサバティブ、)ハイブラウという4つのパワー・エリート批判は、米国思想史の潮流を整理したかたちになっている。このような整理は、大衆とエリートをめぐる社会科学の分水嶺を明らかにする。そして、「よりどころのない立場」、「マルクス主義への接近」、「史的唯物論の再構成」といった議論に解消できない、ミルズ社会学の実質を直視することが可能になる。

それは、「一般の米国人が実感していたこと」を手がかりに考えてゆくことである。特殊性という学問用語の概念的な系譜をたどり、分析するような議論だけでは、ミルズの歴史的特殊性論の意味、公共社会学の意味、そして社会学的想像力の意味はくみ尽くせない。

N.B.

60年安保の時代、実感主義を掲げた加藤秀俊を、大江健三郎は強く批判した。ミルズは、方法の問題も強く意識している。

概念と実感との照合が、公共社会学の根拠であり、政治的公衆の根拠であり、社会学的想像力の根拠である。そのために、ダニエル・ベル (Daniel Bell) の『パワー・エリート』批判と対峙することが必要となった。ミルズは、「ハイブラウでないもの」を織り交ぜ、リベラル、ラディカル、コンサバティブな社会科学を批判した。その焦点となるのが、社会学的想像力であり、歴史的特殊性である。これを考察することで、ミルズの公共社会学＝政治的公衆論の実質も明らかにすることができる。

知識人ミルズは、つねに“Big shot”を狙っていたという (Aronowitz 2009)。そこには、ミルズの論壇的な野心や、たぐいまれな商才や交渉力が見え隠れすることは否定できないが、「一般の米国人なら誰でもうすうす感じていたこと」に訴えかける意味もあったと考えられる。

『パワー・エリート』では、ポストや利害の配分、人脈や談合など、下世話とも言えるような話題を交えて、ひとびとにあまり知られていなかったパワー・エリートの世界が描かれている。冒頭で、——自身の生活圏 (milieux>pl. medium + lieu) の履歴でもある——ローカルな社会と大都市上流社会を考察している。調査や史料、そして理論を重ねあわせて、社会構造の内情が描かれている。自由と平等、ゆたかさや安心への疑問を明視化するような、得体の知れない巨大機構のイメージが、米国人の生活実感にストンと落ちるよう、計算された記述がなされている。

人々の生活圏と社会構造、個人史と歴史を照らし合わせるのは、社会学的想像力の基本である。ではなぜ、「歴史的特殊性」＝歴史的にスペシフィックなのか。『社会学的想像力』の基本的な区分をてがかりに、これを次に考える。米国人の実感をスペシフィックに言語化し、明視化することが、ミルズの「方法の問題」だったのではないか。これが仮説である。

N.B.

Stanley Aronowitz, Taking It Big: C. Wright Mills and the Making of Political Intellectuals, Columbia University Press 2014.

ほかには、Geary, op.cit. 2009など。

4.3.4. “specific milieu”

“specific”は、『社会学的想像力』に、75回(“specificity”などを含む)出てくる。文庫版翻訳では、文脈に応じて、「特定」、「具体的」などと訳し分けられている。“historical specificity”のみ、「歴史的特殊性」と訳されている。まず、『社会学的想像力』の次の部分に注目したい。

「忘れてはいけないのは、特定の生活圏(specific milieu)においては、人がしばしば自分の行為を制御しているということである。こうした制御がどこまで可能かということは、私たちの研究目的の一つである。仮構の世界だけでなく、現実世界にも司令官がいて、さらに企業や国家のトップなどもあることを忘れてはならない。しばしば注意されてきたことであるが、人は何かに黙って従うような存在ではない。この事実が意味するのは、自分の活動についての予測を意識しており、自分自身の方向づけを修正することができ、しばしば修正を行っているということである。しかも、予測どおり動く場合もそうでない場合もある。どちらになるかは今のところはうまく予測できない。人は一定の自由をもっているわけだから、何をするかはやすやすとは予測できないのである。」(Mills 1959 op.cit. p. 116.)

“specific milieu”は、この引用部分も含めて、『社会学的想像力』で6回(Ibid. p.10, p. 68, p. 116, p. 129, p. 135, p. 162.)用いられている。

問題を定式化し、予測と制御を行っていく根拠となる“specific milieu”は、個々人に固有のものである。しかし、ヴィヴィッドな生活実感は、他方で、限定的なものであり、固定化されてしまうと、紋切り型のものになってしまう。そこで、歴史的社会構造を媒介する社会学的想像力が必要になる。総合すると、“specific milieu”は、歴史的社会構造のなかに的確に位置づけられ、さまざまな事象を明視化し、問題化することが可能な状態にある生活圏、歴史的なコンテキストに開かれた生活圏という意味に解釈できる。スペシフィックなものとは、——少なくとも冷戦期においては、——歴史的社会構造と生活圏を交差させ、問題化するもの、ということになるだろう。

4.3.5. スペシフィックな“trouble”と社会学的想像力の定義

ミルズは、生活圏における行為の予測と制御について述べている。そうした実感の根拠としての生活圏は、スペシフィックであるためには不可欠である。ミルズは、普通の米国人ならば、「なにかおかしい」と「感じている」ことを起点に『社会学的想像力』を論じ始めた。プライベートな“trouble”は、パブリックな“issue”とともに、社会学的想像力を働かせる重要な区分とされている。

日常的な生活圏では、こうしたことばの利用(uses)、語用(pragmatics)が、日々行われている。状況によって、ことばの使われる意味は、概ね決まっている。人々は、状況を理解して、ことばを当てはめ、意思疎通をする。こうした行為は、スペシフィックである。

「スペシフィックな“trouble”は、公論の“issue”と関連付けられたものであり、米国のコミュニティ、タウンシップにおいて、公衆の要件と見なされる。これが、歴史的な大変動のなかで、再検討される必要が生じた。その対処を目指したのが、哲学の改造、知の改造といった20世紀のプロジェクトである。予測と制御とは、『社会学的想像力』でミルズが批判した社会科学の核となる着想である。

分析的な抽象を行うことで明視化されるものがある。しかし、それは現実ではない。現実と抽象を混同せず、そこから翻って現実を説明する。そこでミルズが重視したのは、分析、抽象など、どんな明視化も、ひとつの(specific)ものであり、普遍的に妥当するものではない、ということである。そして、冷戦期の米国で、社会問題をスペシフィックに考えるためには、いったん立ち止まり、歴史的社会構造と生活圏とを「利用」できなければならない。そうミルズは考えたのではないか。こうした省察は、社会学的想像力の定義と関わっている。歴史的特殊性、歴史的にスペシフィックであるということは、古典的な社会科学の知見と生活圏の実感を媒介するものではないか。社会学的想像力を定義する区別——“trouble”と“issue”、“milieu”と“social structure”、“biography”と

“history”など——が、“specific”ということばで媒介されている。この区別も、一時代の状況においてスペシフィックであるものにすぎない。

N.B.

スペシフィックな“trouble”の意味を理解しようとするとき、大きな手がかりとなったのが、最所フミによる“trouble”の説明(『日英語表現辞典(ちくま学芸文庫)』筑摩書房、2004)である。「この言葉には、colloquial ない方がいいが、あって、馴れない人には的確に意味を掴むのが難しい。「悩ます」とか、あるいは何となく「厄介なこと」という意味に受け取って、たいていは曖昧に解釈してしまう。He got her into trouble. と言えば、その意味するところは一つしかない。「面倒なことにした」などという vague なことではなく、「男が結婚もしないで女を pregnant にした」という意味である。妊娠させることは面倒なことには違いないが、ただの「面倒なこと」とか、「厄介なこと」というのでは、その意味を的確に掴んだとは言えないのである。」この引用に続いて、意味が決まっている例がいろいろ書かれている。

こうしたことばの利用と、歴史の利用を関連づけるように、ミルズの議論はなされているように思う。

N.B.

他所でも引いた鶴見俊輔の文章を引用しておく。「『資本論』第一分冊に:筆者補充)注釈があつて、「価値」というとき、「自分はここでの価値を交換価値に限定する」と。そこが面白いんだ。使用価値は重大であることは認める、しかしあえて捨てると言っている。ここは哲学者としてのマルクスの偉かさだね。別の考え方があるって認めているんだ。抽象には、つねにその働きがある。・・・俗流のマルキシストは、抽象と現実を混同しちゃう。それはクワインが言う、「モノと言葉を混同している。そうでない人間は、今三人しかいない。タルスキとカルナップと自分だ」という、その洞察と非常に似ているね。」(『たまたま、この世界に生まれて——半世紀後の『アメリカ哲学』講義——』Group SURE、2007、p.p.208-209)。

4.3.6. “specificity”と動機の語彙論——なぜ“milieux”か

ミルズは、学術用語や論壇用語——“social structure”や“issue”——を用いつつ、他方で生活圏のことば——“trouble”——を交差させ、社会学的想像力を定義している。それでは、なぜ、“milieux”(生活圏)ということばが選択されたのか。

ここで、1990年代頃から社会運動論で、ミリュー(milieux > milieu 「あいだ」)概念が注目されてきたことに言及しておきたい。この概念は、生活圏と公共圏の連結を論じる際にしばしば用いられる。社会運動論のミリュー論では、特にミルズへの言及はないものが多い。

N.B.

社会運動論としては、松谷満他「東京の社会的ミリューと政治」『徳島大学社会科学研究所』20 徳島大学、2007。文化社会学、ドイツ社会学研究としては、田中紀行「現代ドイツにおける(文化と社会構造)研究——ライフスタイル研究を中心に」『社会学雑誌』15、1998。ドイツ史研究としては、高橋秀寿『再帰化する近代——ドイツ現代史試論市民社会・家族・階級・ネイション』国際書院、1997。同「ドイツ「国民」の歴史の変遷と現在——ミリューと「想像の共同体」——」『立命館言語文化研究』6巻5・6号併合1995。地理学、地学の観点からは、西川治「人間と環境——人間環境学への序章——」『地学雑誌』100(6)、1991。

政治学者の高橋肇は、ミルズの『社会学的想像力』との関わりで、ミリュー概念を論じている。高橋は、『社会学的想像力』のもととなった論文が「大衆社会とリベラル・エデュケーション」(1954)であり、そこで“mi-lieux”は、12回登場すること、起源はイポリット・テーヌ(Hippolyte Adolphe Taine)から、オーギュスト・コント(Auguste Comte)やアレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville)にまで遡ることを指摘している。ミルズの議論のポイントは、政治的公衆の条件として、リベラル・エデュケーション、リベラルアーツの改造があげられ、その要として、社会学的想像力が位置づけられていることである。

そして、これは、動機の語彙(vocabulary of motive)論、ことばを「利用」する“pragmatics”——ミルズの初期の用語で言えば記号学を社会学化した“sociotics”——と関連付けて理解することができる。動機の語彙は、問題の適切な言語化に用いられる。動機の語彙とは、あてはめることで、瞬時にスペシフィックな理解と解決を可能にすることば(速記用語 **short hand terms**)である。『社会学的想像力』において、動機の語彙と“**milieux**”は同じ場所で論じられている。

「人々が知りたいのは社会的・歴史的な現実である。...(中略)...人々は事実を切望している。人々はその意味を探している。そして、自分自身を理解する手がかりとなるような信頼できる「大きな図絵」を欲している。人々はまた、指針となる価値、感情表出の方法やスタイル、動機の語彙(vocabulary of motive[状況を理解し、納得させる理由を付与する言葉])を求めている。これらを今日の文学に求めても、簡単には見つからない。文学に見出されるべきこれらの精神があるかどうかの問題なのではない。多くの場合見つけられないことが問題なのである。」(42 Mills 1959, op.cit. p. 17.()補充部分は同訳、p. 40)

動機の語彙はもう1カ所本書で用いられている。

「人間の動機づけは、ある社会で安定した納得を与えている動機の語彙によって、そしてそうした語彙の社会的な変化やゆらぎによって、理解されなくてはならない。いや動機の典型的な自覚のされ方は人によって様々であるということすら、そのように理解されなくてはならない」(Mills 1959, op.cit. p. 162)。

N.B.

すでに述べたことだが、ミルズは、若い頃に、プラグマティズム、とりわけチャールズ・W・モリス(Charles W. Morris)の記号論に傾倒し、語用論(pragmatics)の社会学化する“sociotics”を提唱した。『社会学的想像力』の批判でも、この着想を用いている。すなわち、システム論を分析的な用語の統語論(syntax)にこだわるもの、計量調査を計測変数の意味論(semantic)にこだわるものとして批判している。統語論と意味論の媒介は、社会学的想像力の定義と関わる。そして、動機の語彙論と社会学的想像力の関係もここに示されていると思う。

ミルズが、トクヴィルやテーヌを評価するのは、生活圏と公共圏を媒介するスペシフィックな「図絵」を描出しようとしたからである。そして、彼らが用いた“**milieux**”とは、状況を適切に(specific)判断して問題化する場として考えることができるだろう。ミルズは、次のように、文芸や芸術においても、“**milieux**”の「図絵」の提供、適切な————歴史的にスペシフィックな——言語化ができないことに触れている。リベラルアーツと古典的社会科学を交差させる場、そして政治的公衆のポテンシャルを際立たせるために、“**milieux**”という媒介する語彙が選ばれたのではないだろうか。ミルズが、——抽象的な統語体系や変数体系のみならず、——法則探求の固定化も批判していることにも注意したい。

「テーヌは、「社会学者」にはならず、「文学者」にとどまった。そのことは、おそらく一九世紀の社会科学の大半が、自然科学者において確立されたのと同じような、「法則」を熱心に探求していたことの証明である。適切な社会科学を欠いていたことから、批評家、小説家、戯曲家、詩人などが、身のまわりの問題、さらには公的問題を定式化する主たる、しばしば唯一の担い手となった。芸術は、劇的な切れ味を可能なかぎり発揮して、問題としたものを表現し、しばしば注意を喚起する。」(43 Mills 1959, op.cit p. 18-19.)

5. 比較社会学とアメリカ社会学史—現代はミルズを前に何を意味するか

以上をまとめておく。

ミルズから見れば、情報化、グローバル化による非構造化を、新しい大衆社会の問題として考えることができる。こうした状況認識は、常識的な区別や単位の無効化を指摘した松村2022の議論とも共鳴する部分がある。そこで提起された社会学的想像力の再構成についての二つの方途のうち、前者に近い方向からの再検討をミルズは示唆しているように思われる。

- 1 社会の構成単位の逐次的点検
- 2 社会の単位の更新
ジャンル分割の可能性

ミルズは、多くの一元論を類型化して、媒介原理論として整理した。その基本構図は、価値と構造、原基的なものと派生的なものである。法則的な連関や秩序を相対化して、他でもあり得た可能性を点検し、偶然的に達成されたものを記述するのが、学術的な意味でのスペシフィックな方法である。こうした類型論は、少数者の支配、非構造化＝大衆化の合理的な一面を否定するものではない。

こうした媒介原理論は、動機の語彙論と表裏一体のものである。そう考えると、ミルズの議論は、逐次的点検を超える契機を胚胎しているようにも思われる。

組織化の進展という論点はなお残るかもしれない。

そのことよりも重要なのは、ここに拓けるアメリカ社会学史の展望はどうなるのかと云うことであろう。本報告の視点からすれば、最大の手がかりは、デュルケム、ヴェーバーから、動機付与論までを展望した井上俊の論考だろう。特に井上1975は、作田啓一の大衆社会論検討などとも照合して検討する必要がある。

アメリカ社会学史という観点、世界史の焦点移動という観点からの議論を深めることも可能だろう。こうした視点から、比較社会学なのかを考えることもできる、すなわち

ヨーロッパとアメリカ
アメリカと日本
あるいは、その他の地域

などを比較考察すること。そして、次のことを問うこと。

世界で西欧にのみなぜ高度な工業化社会が成立したか？
東アジアで日本にのみなぜ高度な工業化社会が成立したか？
なぜ米国は20世紀の覇権国家になり得たのか？
21世紀に、経済と政治はどうなるのか？
地域をどのように構想、デザインしてゆくべきか？

政治的公衆とは、公衆と大衆、個人と社会、判断構造と社会構造、構造化と非構造化、具体性と純粋性、概念と始原・・・区分や単位の極を照合して、スペシフィックな解決案＝速記用語としての動機の語彙を案配するものではないか。

よりどころ、おとしどころの案配の歴史としての社会学史

N.B.

シンボリックメディア論 動機付与論 ユニットアイディア論の比較検討。

補遺：翻訳・編集する政治的公衆

「柄谷行人は、二葉亭四迷を中心に翻訳論を展開した折、ルターの聖書翻訳に触れ、ジャコビーが言った人々に届くということとは正反対の面に触れている(柄谷行人2005)。それは、ラテン語の聖書によって、近代ドイツ語が体系的に整備されたという側面である。柄谷は次のように言っている。

「ルターが『聖書』をドイツ語の俗語で翻訳したこと、そして、それが標準的なドイツ語になったことはよく知られている。フィヒテは、ドイツ語をギリシャ語のみが比肩する唯一の原言語であり、その他の不純な言語と異なると言った。彼はドイツ語が翻訳によって形成されていることを忘れて、そのオリジナリティを主張しているのだ。ドイツ語だけではない。近代なナショナルな言語はすべて翻訳を通して形成されているのである。しかし、大切なのは、何故ルターの翻訳がドイツ語を形成してしまうほどの強い影響力をもったのかということである。ベンヤミンは、ルターの『聖書』がもった影響力を、やはり、それが逐語的な翻訳であったことに見出している。」(柄谷2005、p.14-15)

わかりやすい、こなれた訳をする意識は、意味に囚われた翻訳である。これに対して、逐語的翻訳とは、翻訳元において意味に囚われている「純粹言語」を、翻訳先のことばにおいて救済する作業である。そう柄谷は言う。(柄谷2005 p.13)ルターの翻訳は、テキストへの揺るぎない信仰に基づいたものであり、神聖なもの、純粹なものを救出する営為であった。翻訳とは神的な不変に向けた探求である。柄谷はベンヤミンの翻訳論を引用している。

「純粹言語とは、みずからもはや何も志向せず、何も表現することもなく、表現をもたない創造的な語として、あらゆる言語のもとに志向されるものなのだが、この純粹言語においてついに、あらゆる伝達、あらゆる意味、あらゆる志向は、それらがことごとく消滅すべく定められたひとつの層に到達する。そして、まさにこの層から、翻訳の自由はひとつの新たな高次の正当性をもつものであることが確認される。この自由は、あの伝達される意味——この意味から解放することがほかならぬ忠実さの使命なのだが——によって存続するのではない。翻訳の自由はむしろ、純粹言語のために、翻訳の言語を抛り所としてみずからの真実性を証明する。異質な言語の内部に呪縛されているあの純粹言語をみずからの言語のなかで救済すること、作品のなかに囚われているものを改作のなかで解放することが、翻訳者の使命にほかならない。この使命のために翻訳者は自身の言語の朽ちた柵を打ち破る。そのようにして、ルター、フォス、ヘルダーリン、ゲオルゲはドイツ語の限界を拡大したのだった。」(ベンヤミン1996、p.407-408)

ここに描き出されている翻訳は、普遍的な純粹性、神聖性に向かうことであり、翻訳者はそれを実践する歴史的な主体である。公衆を、そうした翻訳者としてとらえ返すこともできるであろう。対話する相手が、社会的な弱者、マイノリティ、あるいは「向こう岸」(良知力)の人々である場合も同様であろう。そうした対話においては、当たり前を疑い、異化することは、純粹型を探求する双方向的な共同作業としてとらえられることになる。そしてこう考えることで、大衆文化におけるアウラに注目すること、わかりやすく語ることなどが、普遍的な歴史的主体の往還的、媒介的探求として明確にとらえ直される。

ミルズが提起した動機の語彙論は、ことばの原基的構造を問うものだった。これを、ことばの純粹型などと読み替えれば、翻訳と言語の純粹型という論脈に接続することも可能となる。また、ミルズにおける公衆論の展開、世界戦争論などを、動機の語彙論に照らして、歴史の主体論として読み替えてゆくこともまた可能となる。こうした解釈を採るならば、アメリカ社会学のなかで例外的にヨーロッパ的な視点に立った社会学者、晩年のマルクス主義への接近といった旧来の解釈を積極的に再検討しなくてはならないかもしれない。矢澤2012は、そうした再評価の是非を問題提起していたようにも思われる。

...

すなわち、情報資本主義がグローバルに展開する現代社会において、デューイ的な公衆の改造論は有効性を持つのかということ。」(伊奈2015、前掲論文)

N.B.

柿木伸之『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』平凡社、2014
柄谷行人『近代文学の終わり』インスクリプト、2005

補遺: 文庫版『パワー・エリート』解説より

「今／ここで『パワー・エリート』のもつ意味は何なのか。

日本で、バブルがはじけたあとの一〇年間は、空白の一〇年などとも呼ばれた。世紀が変わっても空白の時代は続き、すでに三〇年以上のときが流れている。こんにち、貧しさが実感される事件やデータが、日々メディアをにぎわせており、「格差社会」はますますリアルなものになっている。しかし、貧困に苦しむ人々が組織化され、有効な運動や政策に結実しているとは言えない。

米国では、トランプ大統領が誕生した。SNSを使いこなすビジネスマンで、プロレスのリングでも活躍したパフォーマンスである。貧しい人びとの喪失感、誇りの復活、アメリカ・ファーストという声に変換された。アル・ゴアやバラク・オバマらが訴えた環境、平和、人権をめぐる「知性的」な言説は蹴散らされてしまった。日本でも同じようなことを目にするのはしばしばある。

思い出すのは、ピース・ボートの運営とも関わった社会学者新雅史さんからうかがったお話である。冬の寒い日、貧しい人びとの立場に立つ政党の選挙演説に出かけると、こざっぱりしたファッションで、むずかしいことばを用いて政治を語る聴衆が目についたという。他方、政権与党の選挙演説に出かけると、ネットをみて、やってきたのだろうか、安心を語り、国家の誇りをわかりやすいことばで語りかける政治家の話を、ボサボサの髪型よれよれの服装で、ぶつぶつとつぶやき、震えながら聞いている若者たちの姿が目についた、というのである。

これが若者の一面であることは否定できないだろう。彼らは、SNSや動画サイトを通して情報を得て、自分たちの声を発信する。メディア映えをめざしたやりとりは、いわゆる炎上を生み出したりもする。かつてのマスメディアのような一方的な情報の流れではない。しかし、ネットを通して一人一人に耳障りのいい情報が、狙いすましたように届けられる。

では、操っているのは誰なのか。強大な政治権力なのか。巨大な経済資本なのか。権力者の実体は見えない。政治家も、官僚も、財界人も、加速度がついて止まらなくなったような状況を制御 (under control) できているようには見えない。強大なパワーゲームが、ときに冗談のような稚拙なことばや理屈やパフォーマンスで語られる。しばしばそれは堂々とまかり通り、政権政党は選挙で勝利し続ける。与党も野党も、あら探しに奔走し、貧相な政治、沈滞した経済は続く。

公衆に向かって語り続けたミルズのパフォーマンスは、こうした状況下で、以前にも増して重要であると思う。『パワー・エリート』が書かれた時代の政治経済状況、国際状況は、今とはまったく異なる。しかし、制御という観点から見ると、問題状況は変わらない。当時は社会主義と資本主義の対立があり、核開発競争が行われ、核戦争の危機もあった。『パワー・エリート』はなにより、集中した権力の制御不能を直視することを、公衆に訴えた書物である。」

「こんにち、グローバル化や高度情報化という変動のなかで、ふたたび家族、地域、仕事、学校など生の枠組みの問題、人間の安全と自由の問題、日本社会の再組織化の問題が、クローズアップされている。核家族は融解しはじめ、未婚、非婚、少子化が問題化される。あちこちの地域が、臨界状態に直面している。雇用も変わる。日本的安心の象徴であった終身雇用について、日本的経営の象徴であったトヨタが、このままではもたない、という見通しを発表した。社会のほころびが随所で顕在化している。アンダー・コントロールの決め手として持ち出されるのは、安心などのスローガンであったり、旧来の道徳であったり、ナショナリズムであったり、強い指導力であったり、あるいは金融政策であったり、リストラであったりと、対症的なものばかりが目につく。「格差社会」とは、誰も彼もが「ワンチャン逆転」の特効薬を熱望する社会なのかもしれない。

「担い手のない時代」に、「格差社会」の問題をラディカルに問い直すことが現代社会の課題だとすれば、一時の繁栄をバックとしてさまざまな「よりどころ」がそれなりに説得力を持った時代に、安直な「よりどころのファシズム」を懐疑した『パワー・エリート』は、今なお示唆に富んだものであると思う。」

